

研究課題

生活言語と学習言語の充実による日本語能力の育成

副題

～目・耳・人を柱としたICT機器の活用を通して～

学校名	アグアスカリエンテス日本人学校
所在地	Avenida del lago 161 jardines del parque, aqua scalientes AGS MEXICO c.p. 20270
学級数	8
児童・生徒数	49名
職員数/会員数	10名
学校長	蒲 英昭
研究代表者	菱田 知成
ホームページ アドレス	http://www.geocities.jp/escuelajaponesa/



1. はじめに

日本人学校は、海外という現地でしかできない教育実践を行いながらも、海外に在住する日本人の子女に、日本で行われている教育と同じ教育を提供していく場である。日本と同じ教育を行う上で、海外という日本とは異なる環境に子どもたちが置かれているが故に困難な状況もある。

本校の子どもの実態として、学習中でのつまずきに2種類のものがある。「学習そのものつまずき」と「言葉のつまずき」である。「言葉のつまずき」は、発問や説明の意味がわからないということが主である。これは、メキシコでは日本の新聞、書籍を手に入れることが大変難しい上に、海外の小さな日本人コミュニティにいるため、少数に限られた日本人としかかかわる機会がなく、日本語能力を磨く機会が少ないことが原因の一つである。また、日本国内においては、テレビやラジオなども、子どもたちにとって日本語能力向上のための有効な言語インプットとなるが、ここメキシコにおいては、日本語番組の視聴は極めて困難な状況にある。両親のうち、一方がメキシコ人（日本語を母国語としていない）の場合、家庭での十分な日本語のインプットを得るうえで問題はさらに深刻である。この「言葉のつまずき」を取り除いていくためには、日本語能力を高めていくことが必要不可欠である。

2. 研究の目的

日本語能力には、生活言語と学習言語の2つの側面があると考えられる。生活言語は、日常生活で利用する言語である。本

校は全校児童生徒46名、1学年最多12名の小規模校であるため、子ども同士のかかわりから日本語能力が磨かれるチャンスは少ない。放課後も親や友だちなど限られた人とのかかわりしかないため、多様な日本語にふれる機会が大変少ない。

学習言語は、学校を中心とした、物事を学習していく上での言語である。学習を進める上で、言葉のつまずきから学習意欲が低下する子どもも少なくない。また、語彙の意味を説明しても、生活言語の乏しさから理解できない場合もある。インターネットの普及により、様々な語彙を知るチャンスはあるものの、子どもの嗜好に偏りやすく広がりはない。現地で日本の書籍を購入することはできず、教科書や本校図書館の蔵書など限定された中からしか日本語にふれるチャンスがない。

このような実態の中で、生活言語、学習言語の両面から子どもの日本語能力を高めていく環境をつくっていくことが必要であると考えられる。生活言語では、より多くの日本人とのかかわりの中から、幅広く日本語にふれる機会をつくっていききたい。学習言語では、デジタル音読学習、webメディアの活用を通して、耳や目を使って語彙にふれ、豊かな学習言語を習得させていきたい。

3. 研究の方法

(1) ICT 機器を活用したデジタルコミュニティの形成（人とのかかわりの広がり）

- ・ リアルタイムコミュニケーション、オンデマンドなどを利用し、より多くの人とのかかわりをもちやすくする。
- ・ かかわる相手には、同年齢の児童生徒はもちろん、子ど

もの血縁者（叔父・叔母、祖父母など）、知人の大人や面識のない者とも行うことで、幅広い人とのかかわりができるようにし、幅広い生活言語に触れるとともに、学習言語にも触れられるようにする。

(2) 朗読データベースの構築

- 教科書や児童書、子どもが興味を示すであろう人気書籍を、教師・保護者を中心に、手本朗読したデジタルコンテンツを作成し、子どもが繰り返し聞く中でよい朗読に数多くふれられるようにする。
- 手本朗読をもとに、デジタル録音・録画した子どもの朗読データベースを作成する。データベースで自分自身や友だちと朗読の仕方を確認することで、手本朗読に近づけるようにする。

(3) 子どもへの日本語活字紹介と web 新聞の活用

- web新聞を用いて、NIE（教育に新聞を）活動を行っていく。時事ニュースやコラムなどを中心に、様々な語彙にふれ、学習言語の習得を図る。
- 子どもが幅広いジャンルの書籍に興味・関心をもてるように、教師・保護者などによる書籍紹介や読み聞かせを行う。

4. 研究の内容

(1) テレビ電話を活用したデジタルコミュニティの形成（人とのかかわりの広がり）

本校の児童が日本語を使う相手は、同じ学級で学ぶ数人のクラスメート、教師、そして保護者と極めて限定されている。そこで、より多様な相手との言語活動の場を設定するためにインターネットを利用したテレビ電話を活用することにした。

日本人学校の児童は、友だち同士の関わりを通しての生活言語の習得はある程度可能ではあるが、日本で学ぶ子どもたちに比べると十分とは言えない。異年齢、特に年長者に対して、また自分の面識のない相手に対して日本語を使用するという、あらたまった場面の経験に乏しい。そこで、多様な相手として、日本にいる子どもたちの親戚、そして日本の学校に勤める教員とのテレビ電話による交流を行った。交流の内容は、普段保護者、日本人学校の友人や教師などとは行わない内容を取り上げた。まず、メキシコ・アグアスカリエンテ

の様子を児童が紹介し、日本にいる親類、教員からのメキシコの様子についての質問が続き、そして日本の現在の様子について、祖父母や親類、日本にいる教員が紹介する形をとった。

(2) 朗読データベースの構築

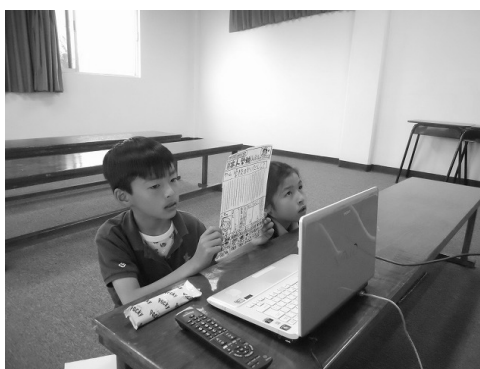
学習言語として、子どもたちが一番頻繁にふれ、またその学習の基礎となるのが国語の教科書の教材である。子どもたちは、すらすらと教材を読むことができるように、その教材を何度も何度も読む練習をするが、学習言語の能力が十分でない中でのアウトプットの練習のため、なかなかうまく読めず、中には意欲を失ってしまう者もいた。そこで、教師・保護者を中心に、手本朗読したデジタルコンテンツを作成し、子どもが繰り返し聞く中でよりよいインプットに数多くふれられるようにした。作成した手本朗読のデータを CD や USB フラッシュメモリに入れ、授業や朝の読書の時間に何度も聴くとともに、子どもたちに家庭に持ち帰らせ家でも何度も聴くことができるようにした。

朗読発表会に向けて子どもたちは、授業、家庭で練習に励む一方、子どもたちの朗読をデジタル録音・録画し、子どもたちが自分たちの朗読を聞いたり見たりできるようにした。子どもたちは自分や友達の朗読をモニターし、その良さや改善点を出し合いながら朗読の質を向上させていった。

(3) 子どもへの日本語活字紹介と web 新聞の活用

日本人学校の子どもたちは、生活言語とともに学習言語にふれる機会が日本で学ぶ子どもたちに比べ少ないが、特に活字を主体とした学習言語のソースは決して多くない。そこで、web 新聞を用いて、NIE（教育に新聞を）活動を行い、時事ニュースやコラムなどを中心に、様々な語彙にふれ、学習言語の習得を図った。社会の授業や、朝の読書の時間の中で毎日新聞の web ページにアクセスし、それぞれの子どもが興味のある記事を読み、その後簡単な意見交換を行った。記事を読むにあたり、自分たちが知らない言葉が出てきた場合は、子ども同士お互い聞きあったり、教師に質問したり、自分で国語辞典を調べるなどして解決を図ることとした。

また、新聞だけでなく、子どもが幅広いジャンルの書籍に興味・関心をもてるように、教師・保護者・子ども同士による書籍紹介や読み聞かせを行った。読み聞かせは、月に一度、小学校 1 年生から中学校 2 年生までを、二学年ずつの連学年



に分けて昼休みの時間に行った。それぞれの学年にあった、絵本などを保護者が選び、読み聞かせを行った。



5. 研究の経過

1 学 期	<p>お勧め本紹介</p> <p>保護者による読み聞かせ (1学期～3学期 月1回)</p> <p>朗読データベース (手本朗読の作成)</p> <p>朗読データベースの構築 (子どもの朗読データベース作成)</p> <p>朗読発表会</p>
2 学 期	<p>Web新聞の活用</p> <p>インターネット環境の整備</p> <p>テレビ電話での日本との交流</p>
3 学 期	<p>研究成果のまとめ</p>

6. 研究の成果と課題

テレビ電話での交流においては、単なる「おしゃべり」ではなく、とても丁寧な言葉遣いでゆっくり話したり、画用紙を使ってわかりやすく説明を行ったりするなどの工夫を積極的に行っていた。また、親類や、日本の小学校の教師による日本の近況についての紹介では、これまで耳や目にすることがなかった言葉に多くふれ、テレビに映る相手に向かってうなずいたり、わからないことに対しはていねいに質問をしたりと、普段、日本人学校では経験することができない日本語の使用場面を体験することができた。

朗読データベースの構築の取組によって、まず子どもたちの中に気持ちをこめて音読をする意欲が増し、自信を持って正しく朗読をする姿勢が以前に増して見られるようになった。何度も何度も朗読 CD を聞いて練習する中で、教材を暗記する子どももいた。また、自分たちの朗読をモニタリングすることで客観的に自分の朗読を見つめ、言葉のイントネーションや読み方の流れを素直に修正することができた。

web 新聞、電子新聞の活用では、これまで目にすることがなかった語彙に多くふれるため、分からない言葉を辞書で調べていくことに慣れていった。また、この活動以外の場面でも積極的に知らない言葉を調べたり、それらの言葉を普段の会話や日記の中に意識的に使ったりしようとする姿がみられるようになった。また、時事問題に関しても興味を持ち、それに関連した話題を日記の中で取り上げるなどの広がりもみられるようになった。

課題としては、これらの活動を継続的にしていくことの難しさが挙げられる。言語は、一朝一夕で身につくものではなく、また発達段階に応じても成熟していくものである。よって、学校の教育活動のみならず、家庭などにおいても、継続して行っていくためにその環境を整えていく必要があるが、なかなか簡単なことではない。例えば、テレビ電話を行うための十分な IT 環境を双方で整えること一つとっても現段階では容易ではない。通信環境のさらなる充実やそれを使う「人」側の理解が不可欠である。われわれ学校現場においても、教師たちの ICT リテラシーを高めるとともに、それを子どもたちの教育のためにどう効果的に活用していけるのかという目を常に養っていく必要がある。